



月刊 千葉労働動向

沖縄派遣団報告 ③

未来のために、 子供達も起ち上がった



館山支部 渡辺 敏博

動労千葉派遣団の一員として、沖縄現地闘争に参加してきました。

三日間の行動のなかでも、最終日の辺野古での命を守る会との交流が一番感動的でした。辺野古は、新たに海上ヘリポート基地が建設されようとしている場所です。アメリカと日本政府は、「普天間基地返還のためには代替の基地が必要だ」と言いながら、ここに海上基地をつくらうとしています。しかし、実際は、50年経って普天間基地が老朽化したため、基地縮小・返還にかこつけて、より機能を強化した新たな基地を建設しようとして

いるに過ぎないのです。

命を守る会の方々のお話しを伺って、昨年12月21日のヘリポート建設の是非をめぐる名護市民投票が、子供たちも含め、まさに家族ぐるみで闘われ、そして勝利した様子がひしひしと伝わってきました。例えば、子供たち自身が、自分の未来のために親と真剣に話し合っていて、親も子供たちの意見に負けて反対に投票したという話や、市民投票に勝利した後、市長が、基地の受け入れを表明して、突然辞任した時に、これをお供たちにどう説明したらいいのか、と思つて訴訟を起こしたことを伺いました。

政府は、「代替基地ができなければ普天間基地の返還は凍結される」と言い、「基地建設をのめば経済的な支援をする」と言つて、大変な攻撃をかけているそうです。しかし、命を守る会の方々は、「新たな基地が建設されたら、半永久的に

現地の方々と共に 人間の鎖で包囲



木更津支部 吉野 道夫

はじめに、組合員の皆さんの多大なカンパにより、沖縄派遣団の一員として行動に参加できたことにお礼を述べたいと思います。

今回の動労千葉の派遣団は9名(家族会2名)で組織され、労組交流センター



の仲間たちとともに5月16、18日にかけて、沖縄現地での闘いに参加しました。今まで、千葉や東京の集会において、沖縄からのあいさつやメッセージ等を幾度となく聞いたことはあり、それなりに状況は理解している感覚をもっていました。現地闘争に参加して現実を見、いろいろな人の話を聞き、ともに行動したことによって、より肌で感じる事ができたと思います。

とくに、普天間基地包囲行動では、現地の方々と本土から応援に駆けつけた人たちが手をとり合つて人間の鎖をつくり、「基地のない平和な街を！」とシュプレヒコールを繰り返して、沖縄と本土がつながったように感じました。そして、「基地など絶対に必要ないんだ」という思いを改めて胸に刻みました。

最後に、日本の米軍基地の75%が沖縄に集中し、沖縄本島の20%が基地だという現実を許すことはできません。そのことを参加者全員で確認することができたと思います。

